



## 三井両替店『日記録』の可能性

神戸大学 経済経営研究所

学術研究員 藤尾隆志

現在、私は当研究所の高槻准教授が進める、「科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（研究成果公開促進費）『近世経済データベース』」のデータ作成のため、『日記録』という古記録と日々格闘している。

『日記録』は、豪商三井家が大坂に開いた両替店の記録である。天気・金銭相場・為替景気・米相場のほか、事象・自然災害が記される。事象の内容は、歴史的事件から三井家個人に関するものまで、バラエティーに富んでいる。

「近世経済データベース」は、江戸時代の日本（特に大坂）の天候・事象さらに相場をデータベース化する計画である。歴史的事象や自然災害がどのように当時の相場に影響を与えたかを知る手がかりとなる。そのため、今回のデータベースでは、経済史に関する事象を中心にピックアップするが、『日記録』ではその他にも興味深い出来事が記されている。今回はそれらの中から、何点かを取りあげてみたい。

### ①捨て子

寛政10年（1798）11月11日、寒さもいよいよ厳しくなってきた頃、三井両替店の表にある用水路の上に0歳児と思われる男の子が捨てられていた。三井家であれば粗末な扱いは受けたくないと思いき、捨てられたのだろうか。町代（町役人）が三井両替店に赤子を引き取りに来た。また、三井両替店はその旨を大坂町奉行所に届出ている。

当時、町内で捨て子があった場合は、その町で養育することが求められた。今回も三井両替店がある高麗橋一丁目で養育する計画であったが、玉造半入町の大黒屋嘉七という者が赤子を引き取りたいと申し出てきた。聞くところによると、今年正月に女の子が生まれたのが、11月18日に亡くなったのだという。亡くなった娘の代わりにと考えたのかもしれない。

赤子の捨て子を養育するにあたり、母乳が必要になる。大黒屋も乳には問題ない旨を強調している。三井両替店も粗略には扱わないと考え、大黒屋に引き渡すこととした。三井と大黒屋、そして赤子を貰い受けに来た河内屋兵蔵より町奉行に願書を提出し、認められた。これでこの件は落ち着いたかに思えた。

ところが翌12月15日になって、貰われた赤子が病気になったと連絡が入った。そこで町の者たちが確認に行ったところ、赤子はすでに亡くなっていた。貰人と三井、そして町代はその旨を町奉行に届けたが、問題なく「お聞き済み」となったという。町は捨て子が引き取られた後も、その監督を求められたのである。

三井に限らず、豪商に子供が捨てられることは珍しくなかった。そして、貰い手があっ

でも必ずしも永く生きられたわけでもない。町内の子供に対するいわばセーフティーネットの存在とともに、当時の子供が生きていくことの困難さが、この一件からも窺えるように感じる。

## ②江戸屋

『日記録』からは、「江戸屋」の名前が散見できる。江戸での災害や幕府役人の「御役替」、さらに幕府から御用を命じられた大名の一覧などを三井両替店に情報提供している。江戸には三井の関係者が多く住んでいる。幕府役人が替われば、経済政策も変わるかもしれない。御用を命じられた大名からは借財の申し込みがあるかもしれない。これらの情報は、三井にとって必要なものであったと考えられる。

それにしても、江戸屋はこれら情報をどうやって入手するのだろうか。実は江戸屋は、三井と懇意の大坂の飛脚問屋（町飛脚を仕立てる問屋）であった。三井家内で荷物を発送する際に飛脚問屋を活用していたようである。

飛脚問屋は幕府・大名の公文書・私信も取り扱った。当然、幕臣や大名とのつながりも出来る。三井としては飛脚問屋の情報網を活用しつつ、自らの経営に活用しようとしたのだろう。

ところで、現在の郵便もそうであるが、時には配送トラブルも起こった。文化10年(1813)5月、三井両替店の江戸店から大坂店に宛てた、「外番状」と「十六番之書状」が届いた。しかし道中に損傷したため、江戸屋より三井へ詫び状が届いた。江戸屋によると、箱根山にて運んでいた馬が飛び跳ねたため、荷物が破損したらしい。おまけに、道中は人馬ともに差支えがあったうえに、宮宿（現名古屋市）から船で運ぶところ、沖合の天候が悪く「乗り戻し」となったために、三井の指定する日限までに間に合わなかった。江戸屋は三井に詫びるとともに、飛脚の者へは厳しく申し付けること、さらに紛失の物があれば江戸の飛脚問屋である大坂屋茂兵衛から弁償すると伝えている。余談だが、江戸屋はこの後文政年間になって、「不調法」のために飛脚問屋の立場を追われることとなる。

三井と飛脚問屋の関係からは、飛脚問屋の役割とともに、飛脚問屋同士のネットワークが見えてくるのである。

## ③三井の金貸し出し

三井では、伝統的に大名への融資を避けていた。例外は三井家発祥地の領主である紀州徳川家と、恩義がある牧野家、そして幕府の高官である。

しかし、時には例外的に金銭を貸し出すこともあった。文化8年(1811)11月16日、御普請役の伊藤佐之吉という幕府役人が大坂に到着した。当年は対馬において幕府と朝鮮通信使が面会することになっており、伊藤もその役で対馬に向かう途中だった。

伊藤は三井両替店に対し、金五両の拝借を申し出た。道中での召使の出費が多く、困っているという。江戸にもどったのち、幕府より御役銀が下されるから、江戸の三井両替店に返済したいと願い出た。

三井にとっては微々たる額であるし、一応幕府役人ではある。しかし取引先でもなく、またこのような形で貸し出したことはないという理由で、一度は断ろうとした。しかし、伊藤は引き下らない。自らの親の佐吉が実は三井家と懇意であり、内々に「お世話」を

したと主張して、再度拝借を申し出た。三井両替店が確認したところ、三井家の三井高一と懇意であることがわかった。高一本人からも貸すことが「然るべき」であるという意向をうかがったため、今回は特別に五両を貸すこととした。正直三井両替店には迷惑な話だったかもしれないが、三井一族の名前を出してきた以上、安易に断ることもできなかった。

『日記録』には他にも両替店内部の話、三井家自身の話、三井両替店が所属する町の話など、話題に事欠かない。果たして何本の研究論文が書けるかと思う。多くの可能性を秘めた史料であることを示しつつ、稿を終えたい。

#### 参考文献

「駅通志料」を読む会「資料紹介 郵政資料館所蔵『二条・大坂御城内刻附定飛脚曆代記』」  
（『郵政資料館研究紀要』第3号、2012年）

沢山美果子「「乳」からみた近世大坂の捨て子の養育」（『文化共生学研究』第10号、2011年）

丸山雍成編『日本の近世6 情報と交通』（中央公論社、1992年）

公益財団法人三井文庫編『史料が語る三井のあゆみ—越後屋から三井財閥—』（吉川弘文館、2015年）